

論考◎特集・地域と環境

旅をしながら考えた——地域と環境、時代と適応

仲野 徹 (大阪大学大学院生命機能研究科・医学系研究科教授)

Toru NAKANO



1957年、大阪市生まれ。1981年、大阪大学医学部医学科卒業。内科医としての勤務、京都大学医学研究科講師などを経て、1995年に大阪大学微生物病研究所教授。2004年から現職。いろいろな細胞がどのようにしてできてくるかについての研究をおこなっている。おもな著書に『なかのとのおの生命科学者の伝記を読む』ほか。

わたしは生命科学、すこし聞き慣れない言葉かと思うが、エピジェネティクスと呼ばれる分野を専門にしている研究者であって、特集の「地域と環境」などとは、職業上まったくご縁がないのである。いろいろな原稿を頼まれることがあるけれども、多少なりとも仕事に関係あることが常であって、今回のような脈絡のないお題には、はたと困ってしまった。

どうひねっても、研究と関係づけるのは難しい。う～ん、ということで、趣味というほどではないけれど、ここ何年か、ちょっと変わったところへ旅行したこと、そこで見聞きしながら頭に浮かんだことなどをもとにして、自分なりに考えてみようかと思う。素人が、それも、短期間に経験したことからひねり出すだけなので、おかしなことを書いているか

もしれないけれど、そこらは笑い飛ばしてもらえたら幸甚である。

それはイランにはじまった

いろいろな国へ行ってみようと思ったきっかけはイランであった。5年前、イランから、国際学会への招へいメールが舞い込んだ。ブッシュ大



イラン 右上：街中で見かけた喜捨ボックス 下：広場でくつろぐ人々



ブータン 上：お祭りを見る人たち 右：日本とは目の輝きが違う子どもたち



統領から、北朝鮮といっしょに「悪の枢軸」と名指されていた頃である。さんざん迷ったあげくではあったが、行くことにした。スーツケースにミネラルウォーターやトイレトペーパーをいっぱい詰め込んで。そのうえ、妻を弾よけに連れて。

杞憂であった。物はあふれてはいなかったけれど、十分にあった。アルコールは売ってなかったけれど、敵国物資のはずのコカコーラまであった。そして、人々は優しくかった。若い女の子はみんな驚くほど美人で、子どもたちは屈託がなかった。外国人が珍しいせいか、街を歩いていると、いっしょに写真にはいってくれと言われた。行く前に抱いていたイメージとの差が大きすぎて、心底おどろいた。

女の子や、小学生くらいまでの子どもは素直に明るい感じがした。その一方で、青年期の男の子が鬱屈しているように見えるのが気になった。

政治からくる社会環境がそうさせるのかもしれない。イスラムの喜捨の精神があふれているようで、街中に喜捨ボックスがあった。物乞いはまったくいなかった。これは宗教的環境とも言うべきものだろう。

行ってみないとわからないものだが、とつくづく思った。政治のことはニュースを見たら、観光地のことはハイビジョンで見たら、ある程度はわかる。けれど、どの地域にどんな環境があって、そこでどのような生活が営まれているのか、は、肌で感じてみないとわからない。50歳を超えたころでもあり、死ぬまでに、自分の目で見て「世界」というものがどういうものかを考えたくなった。たとえ短期間であっても、いろんなところへ行ってみようと思った。

ブータンの幸福

そうすると、なんとしてもブータンへ行きたくなった。GNH（国民総幸福量）という考えを掲げ、世界で最も幸福度が高い国。その国が、王政から立憲君主制に移行し、大きく変わっていくのではないかという話を聞いて、早く行かねばと思ったのだ。大学教員にあるまじきことと周囲の顰蹙を買いながら、2010年の年度替わり、パロという街でのお祭り、パロツェチュにあわせて、訪問した。

谷沿いにひらけた棚田は、昔の日本みたいで、はじめてなのに懐かしい感じがした。お祭りをブータンの人たちといっしょにのんびり楽しんだ。出場する人たちは真剣、鈴なりに見る人たちは大喜び。大人も子どもも、ほんとうに幸せそうに見えた。とりわけ、将来は明るいと感じて疑われないような子どもたちの表情がすばらしかった。日本の子どもたちとは目の輝きが違った。

幸福って何だろうかと、真剣に考えた。周囲と比較しての幸福感なら、幸福度が90%などに達するはずがないのだから、幸福というのは自分の気持ちの中にしかない、という平板な結論に落ち着いた。そして、幸福度が高いのは、輪廻転生を是とする仏教の教えと、家族の絆、というバックグラウンドが大きいのかという気がした。

しかし、科学的教育を受けた子どもたちは、いつまで仏教の教えをアプリオリに受け入れられるのだろうか。首都ティンブーは、農村からやってきた若者が増加し、失業率も高い。しかし、その建築労働は、インド人ばかりがおこなっているといういびつな階層性。そんな中で農業を基本とした家族制度もどこまで続くのか。街には、エイズに気をつけよう、とか、家庭内暴力はいけません、とかいうポスターがあちこちに貼ってあった。

ティンブーでのテレビ放送が1996年から始まり、携帯電話は2003年から導入、そしてITが急速に普及し、人々の考えは急速に変化してきているという。大きなお世話であろうが、いまや、あやういバランスの上に立っているように思えてしかたがない。2年前、ブータン国王夫妻の訪日があって、ちょっとしたブータンブームになったのは記憶にあたるらしい。その王妃のバッグは百万円以上もするエルメスのパークインであった。決して豊かではない国民があまねく尊敬する国王家なのである。



モンゴル 上：ゲルの中 下：ほがらかな子どもたち

正直なところ、ちょっとそれはないだろうという気がした。あのキラキラ目の子どもたちが大人になったとき、ブータンはどんな国になっているのだろうか。

モンゴルの草原

いろいろな生き方を見るため、次にモンゴルへ行ってみた。と言いたところなのであるが、実際には、「自転車で草の海へとペダルを踏み出せば、それはまるで大海原に、小さな船で漕ぎ出すかのような広さです」という文句につられて、マウンテンバイクで走りに行きたくなっただけである。そこで垣間見た、二千年以上の歴史があるという遊牧という暮らしは驚きに満ちたものであった。

ゲルでの暮らしは、来る者を拒ん

ではいけない、という掟がある。旅人であっても例外はない。そうしてぶらっと訪れたゲルでは、すべてのことを父親が仕切っていた。今は、町の学校での教育が義務づけられているが、かつては、子どもの教育も、すべて、その生活の中でおこなわれていた。ここでも子どもたちはほがらかであった。馬の乗り方も、大きな子が小さな子に教えていた。千年以上もの間、こうやって教え続けられてきたのだろう。

そのゲルでの生活も大きく変わってきているらしい。太陽発電がとりいれられ、ゲル用の冷蔵庫が売られ、テレビ、そして、ここにもITと携帯電話があった。かつては、ゲルを立てる条件としては、水の利便性が最大のものであったが、いまでは、電波状況の方が重要になってきていると



マダガスカル 点在する小さな集落

いう話だ。若者を中心に、首都ウランバートルの人口も増加の一途をたどっている。基本的なところで、ブータンと似通った構造なのだろう。

遙かなるマダガスカル

そして、この夏にはマダガスカルへ行った。これも、深い考えがあったわけではなく、ただ、バオバブやキツネザルを見てみたい、そして、世界自然遺産である石灰岩の巨大な針山、ツィンギー・デ・ベマラへ行ってみたい、という理由であった。首都アンタナナリボから飛行機で1時間、モロンダバという地方都市から未舗装路を8時間、4WDで揺られに揺られたところが最終目的地であった。

雨期になると車が通れなくなるというその道すがら、小さな集落が点々とあった。めったやたらと子どもが多かった。通りかかると、道端にいる子どもたちが手を振ってくれた。しかし、愕然とするほど貧しかった。電気も水道もないし、多くの家は雨をしのぐことすらできそうにない造り。インフラという言葉がうかばないような状況である。

楽しそうに遊んでいる子どももいたが、川とも言えないような流れか

ら、濁った水を汲んで運んでいる子どももたくさんいた。もちろん飲用、料理用である。大きめの町には学校があったが、小さな集落では望むべくもないし、町の学校へ通う足もない。そこで生まれ、そこで育ち、そこで生きていくことに、部外者がとやかく言うべきではないのかもしれない。しかし、なんともいたたまれない気持ちになった。

そんな中、生活そのものに美しさがある、ということをはじめて知った。ベコパカという町の近く、渡しを生業とする集落で、フェリー——といっても筏にエンジンをつけたような簡素なもの——を待つ間のことだ。上流から太陽がのぼり、河面には陽炎。そこへ、少年が櫂をさす小舟が滑り出てきた。大昔から続いてきたであろう景色。人はただ生き、そこに美しさがあった。日常生活の中で美しさを感じたことがない自分にとっては、美しいだけでなく、驚きの景色であった。

ただ人は生きる

無責任に、どこに生きていても美しさや幸せを見つけられることができる、などと言うつもりはない。しかし、結局のところ、バカみたいな結論で

あるけれど、どんな地域であろうと、どんな環境であろうと、人はただ生きるしかない、生きていかねばならない、ということしかないのである。

どこに生まれるか、ということをして人は選ぶことなどできない。どこで暮らすか、については、ある程度の自由度がありそうだけれど、それとて、よほどの決断をしないと、さほど大きな自由ではない。それに、そのような選択をできない状況にいる人も、世界中には相当にたくさんいる。

イランは乾燥地帯、ブータンは高地山岳地帯、モンゴルは草原、など、環境は地域によって規定されている面がある。マダガスカルなどは、人間が住むようになったこの千数百年で環境は激変したとされているが、多くの地域では、地域の属性としての環境はそれほど急速に変わるものではないだろう。これから地球的な大きな気候変動があれば、その限りではなくなるかもしれないが、そのような自然環境は、人の一生程度のタイムスパンでは、そうそう大きくは変わらない。

しかし、政治や教育、そして技術革新がもたらす環境の変化というのはまったく違った側面を持つ。同じ地域に定住していても、望むと望まざるとにかかわらず、激動、といってよいほど変化する可能性があるし、実際にそうやってきた。幸か不幸か、マダガスカル僻地では、そのような変化はなかなか及びそうにはない。それはそれで、どうなのだろうかと思ってしまうのではあるが。

環境変化のスピード

いきなりちいさな話になるけれど、生まれてこの方、大きな商店街がある大阪市内の古くさい街に住み続けている。ものごころがついて50年、自然環境と社会環境は、変化があったとはいえ、さして大きくはない。それに比べると、電化製品、ITなど

を含めた家庭環境というのはかなりの変化があった。

社会環境は、国や地域による違いがかなりあるので、それが大きく変わらなかったこの50年間の日本は、まれな状況なのかもしれない。半世紀前といえば、ブータンは鎖国のまっただ中、イランはイスラーム革命の前であったし、日本も、その前の50年間は、戦前から戦中・戦後へと大きく移っていたのだから。ちなみに、マダガスカルは50年前といえば、ようやくフランスから完全独立したところだったが、おそらく、田舎の村では、社会環境の変化など、生活にほとんど影響はおよぼしていないだろう。

マダガスカルの辺境は別として、その50年の間に、家庭内の環境というのは、どこでも似たり寄つたりの変化を遂げてきたように見える。しかし、その時期と速度には違いがある。モンゴルの遊牧生活やブータンの都市部での、ITや携帯電話がもたらす家庭内環境の変化は、日本の50

年分が10年分くらいに圧縮されてやってきたような感じだろう。速やかに適応できる人はいいけれど、みんながみんなそういうわけにはいきはしない。

時を旅する

前にも書いたことがあるのだが、旅行するというのには、ある地域へ行くということ以上に、ある時代のある地域へ行く、ということである。なかなか難しいのであるが、できれば、同じところに、何年かおきに行くつもりで旅行すると、いろいろなことがわかるのではないかという気がしている。そうすると、ずっといると気づかないような小さな変化や環境の移り変わりを、現地の人よりも明瞭に気づくことができるかもしれない。気づいていないが、私が住んでいる環境も、よその人が10年おきに眺めると、もしかすると、かなり大きく変化しているのかもしれない。

50代も半ばを超えると、10年単位

ということを考えるようになったりする。子どもたちにとっての10年間というのは永遠に近いから、10年インターバルでようやくわかるような環境の変化であっても、大人にとってよりもはるかに大きく感じられるだろう。ブータンでのこの10年となると、成長しながら違う国に住んでいくような感覚かもしれない。

これからは、それどころか、ものごとがついた頃には、すでにIT環境が存在した世代が育っていく。そして、ITがしのびこんだ社会や家庭の環境というのは、もっと急速に進歩していこう。すでに私などは、ネットがなかった頃、どうやって生活していたかがわからなくなってしまっている。時代の流れといえばそれまでであるが、世代間の適応度の違いをうまく舵取りできないと、社会全体が危うくなっていく可能性をはらんでいるのではないかと、時代の流れに取り残されそうなおじさんは、あちこち旅行しながら危惧してしまうのである。



マダガスカル 夜明けの風景